

## 「離島性」の克服：宮本常一と反転する開発思想

## Overcoming 'Remote Islandness': The Thought of Social Development

by Tsuneishi Miyamoto and Its Paradox

門 田 岳 久\*

KADOTA, Takehisa

**Abstract:** The present study is a critical examination on the social development ideas of Japanese folklorist Tsuneichi Miyamoto, who also engaged in tourism research. This study will illustrate how Miyamoto have viewed the relationship between life and tourism in his time. Miyamoto's developmental ideas were supported by a spontaneous cultural movement of local people objectifying and displaying their lives towards external society, thereby restoring respect for their culture. The background concerning this movement is the rapid depopulation in remote islands and an economic downturn that has given rise to an inferiority complex among people. With the aim of overcoming Remote Islandness through a new type of tourism that arose from the concept of Lifeworld, Miyamoto organized practical activities in Sado. However, this ideal was ultimately engulfed by capitalist logic, which he intended to criticize. Accordingly, this study explores the question of how a movement conceived as a resistance to mass tourism was engulfed by capitalism. With reference to the criticism towards "Relational Aesthetics" relating to recent relational art, this paper asserts that there is a need to consider the possibility of integrating tourism into Lifeworld. It analyzes the paradox that a mindset seeking to beautify the world can occasionally and unintentionally lead the ideal to being subsumed by consumer society and power.

**Key words:** 社会開発 (social development), コミュニティ・ベースド・ツーリズム (community based tourism), 民俗学 (folklore studies), 住民参加 (citizen participation), 佐渡 (Sado Island)

- I はじめに
- II 離島性と開発
- III エンパワーメントと観光
- IV 日本海からの反逆
- V 実践性をめぐる評価
- VI 回収という問題
- VII 結論：参加の隘路と「関係性の美学」

## I はじめに

本論文では民俗学者・宮本常一（1907～1981）の観光文化論／社会開発論を取り上げ、宮本が「民俗」ではなく「生活」を基軸に研究を進める中で、いかなる背景によって観光という主題が出てきたのか、あるいは観光と生活という、近年再

\*立教大学観光学部・准教授

融合が語られている主題が、1960～70年代という時代においていかに関連付けられたのかを明らかにする<sup>1)</sup>。

宮本の社会開発論／観光文化論は、今でこそ当たり前となりつつあるマスツーリズム批判に基づき、地域社会の自立的発展による「離島性」（宮本1980）の克服を主張するものである。そこで彼は観光をエンパワーメントの手段として取り入れたり、観光客のまなごしを地元民が操作することで文化の伝承や再構築を目指したりすることを主張していた。にもかかわらず宮本の議論は、当初の主張とは逆にマスツーリズムや中央の権力への従属や依存体質を招いてしまったと批判されている。この構造は生活と観光の関係を捉える上で重要な論点を投げかける。本論文では宮本個人の思想的な「敗北」—とって良いだろう—を事例としながらも、一個人の営為を越え、生活領域の自立的発展を目指すプロジェクトや思想がいかにしてその批判対象に回収されていったのかを考えていきたい。

方法として、晩年の宮本が実践的観光研究の中心的フィールドとした新潟県佐渡を取り上げる。佐渡は宮本がキャリア後半において50回に亘って通ったところで（池田2010: 22）、民俗調査のみならず農業指導や地域振興に関わる講演会などを多数重ねた。本論文では佐渡における宮本の活動を、生活と観光の融合を念頭に置いた研究／実践として捉えていきたい。

## II 離島性と開発

宮本常一は渋沢敬三のもとでの書生生活を終え、1966～77年に武蔵野美術大で教壇に立つ。その過程で「佐渡研究会」を作り、建築家・真島俊一など後にTEM研究所を設立する学生が集まり、佐渡の漁労習俗や町並み調査を開始する。その活動はやがて「生活文化研究会」や近畿日本ツーリスト「観光文化研究所」へと繋がっていく。一般に民俗学者とされている宮本は、徐々に生活学や民具学への「転向」を果たすと同時に、その立場から観光を捉える新たな実践的研究に進んでいく。その背景には既存の民俗学への強い批判が

あったことはよく知られており、人々の日常性＝生活世界の中から「民俗」を標本採集し、報告書にまとめる旧来の方法から、他者の生活全体を捉える方向へとシフトを図っていた。回顧録『民俗学の旅』には以下のようにある。

百姓たちと生活をともにし、その話題の中からその人たちの生活を動かしている物を見つけてゆこうとすると、項目や語彙を中心にして民俗を採集するというようなことはできにくくなる。（中略）それよりも一人一人の人の体験を聞き、そしてその人の生活を支え、強い信条となったものはなんであったのだろうか、生活環境はどういうものであったのだろうかというようなことに話題も眼も向いていく（宮本1993: 152-153）。

民俗誌ではなく、生活誌の方がもっと大事に取り上げられるべきであり、また生活を向上させる梃子になった技術についてはもっときめ細かにこれを構造的に捉えてみるのが大切ではないかと考えるようになった（宮本1993: 192-193）。

宮本は農漁村を歩き他者と交わる中で、従来の民俗学が項目を立てて採集してきた民俗調査だけでなく、「民俗」を支える日常生活全般の知識とともにそれらが語られることに留意している。「民俗」が「日常生活からきりはなされて存在するものではなく生活の中にあるものである」（宮本1993: 153-154）という彼の主張は、民俗学において決して特殊ではなく、既に桜田勝徳や福田アジオにおいても地域社会（伝承母体）に目を向けた民俗誌記述が主張されていた。ただし福田らの伝承母体論が村落構造のスタティックな社会制度論に向かうのに比べ、宮本の生活論はより具体的、物象的であり<sup>2)</sup>、それが「生活を向上させる梃子になった技術」と表現されるように、民具や技術から生活を捉えるという独自の民具学的発想へと繋がった。

従来の民俗学が重出立証法によってその始

原を探ろうとしたのに対して、技術の共通性と差異性を系統的、系譜的にたどっていくことによって、古い技術をさぐりあて、またそれがどのように変化していったかを明らかにする方法もある。民具を研究対象とすることによって、今まで民俗学が最もなおざりにしていた民衆の日常生活と技術の発達を追求することができるように思うのである（宮本 2005: 13）。

このように宮本の民具学は単に物の形態や分布を見るというより、物質を通じて人々の日常生活を捉えることに主眼があった。その意味で民具学と生活学は表裏一体である。加えて民具を調べる主体が研究者だけでなく、地元の住民だった点も特徴的である。例えば新潟県山古志村での地域活性化講演会の中で、宮本は民具を文化財的な価値の元に収集・展示することを提案しているが、それは「その土地で長い間受け継がれてきた文化財を保存するということは、地元の人たちが、自分の住んでいる土地を見直すことに繋がる」からだという（宮本 2007: 132）。彼は全国各地で民具の収集と博物館への展示を住民活動の一環として取り組むことを提言しており、そこには、民具を単なる道具として見るのではなく、自らの生活を反省的に客体化する要素と認識することを強調し、ひいては観光や街づくりでの文化資源の発見へと結実することを主張している。

民俗から生活へというシフトにはまた、同時代の社会問題に対する応答という実践家としての問題意識が大きく関係したと思われる。晩年の宮本が構想した社会開発論は、地域社会の住民が自らの生活を客体化しつつ学び、外部社会に提示することによって、自文化に対する一種の尊厳を回復するという内発的な文化運動の色彩があった。その背景には高度経済成長期の日本にあって農山漁村や離島で急激な生活文化の改廃や過疎化が見られ、経済的劣勢が人々の文化的コンプレックスに転化していることに、宮本自身危機感を覚えていたことが挙げられる。それが表れているのは、宮本がキャリア全般に亘り強い関心を抱き続けた離島に関する論考である。

宮本常一は離島振興法の成立（1953）に関係し、全国離島振興協議会の事務局長にも就いている。自身周防大島（山口県）出身ということもあり、離島関係の論考は多い。初発の動機は島があらゆる面で立ち後れていることに対する、怒りにも似た告発である。1955年初出の文章では、対馬（長崎県）を挙げつつ、次のように述べる。

そうした生活のよどみの中に残っている古い習俗をロマンチックと見、奇習と見、これをさがしもとめて訪れるものは時々あっても、その生活の低さについて真剣に考えようとする人はいくらもなかったようである。ただ島民の純朴さや古風をたたえるような紀行文や報告ばかりが多かったのである。（中略）島をあるくたびに、この生産と生活の低さはどこから来ているのであろうか、またどうすればそこから抜け出せる緒が見いだせるだろうかを考えるようになった（宮本 1987b: 29）（下線引用者、以下同）。

下線部は宮本において、「遅れ」と読み替えられる。まさに「おくれをとりもどすために」と題されたこの文章では次に、電灯、道路、港、発動機船、バス、トラックなどの一切の生産エネルギーが島に欠如していると述べられ、交通インフラの不備が主たる「遅れ」の要因として説明される。この要因は宮本によると決して島の本質性ではなく、海上交通から陸上交通への「交通の変化」に求められる。

陸上交通の発達から、事情は一変して、島は鉄道の終点から結ばれる袋小路になってしまったのだが、さてそのことに気のついた島の人々が当時何人あったらうか。つまり交通体制の新しい確立が、封建社会を資本主義社会に切り替える動力になったのだが、そのたちおくれから離島は資本主義社会への正式な参加が遅れてしまったのである（宮本 1987b: 32）。

宮本によると帆船を中心とした海上交通が一般

的であった時代において、島は周辺ではなかった。陸上交通が敷かれ都市が交通の「中心」として立ち現れることによって「周辺」が生まれ、島は「離島化」したのである。そしてこの時間軸は戻すことが不可能なので、離島振興法制定2年後において宮本が主張するのは極めて明確である。

島の後進性をとりもどすためには、どうしても島の資本主義経済機構へ正しく仲間入りさせなければならないのだが、それは交通の完備によってなされることを忘れてはいけない。だから離島振興の事業は一応交通網の完備している地域における振興対策と、交通網の不備な地域の振興対策とに大きく二つに分けて、もっと重点的に、もっと問題の所在を明らかにして事業を進めていってみてはどうかと思うのである（宮本 1987b: 37）。

宮本の開発論の中で目立つのは、まずは道路や港などの整備に対して国の財政出動を求める公共事業論である。「資本主義経済機構へ正しい仲間入り」は、離島や周辺化された地域にとって大きな分岐点であったが、その選択の是非はここでとりあえず保留し、ここでは、宮本が民俗学から生活学へと移行して行く際の背景に、このような離島問題に代表される貧困や後進性の解決という主題があったことを確認しておきたい。

### Ⅲ エンパワーメントと観光

離島の問題として認識されていたのはインフラ面だけではなかった。宮本においてより重要なのは、離島ゆえに蔓延する人々の意識上の劣等感や自信の喪失についてであり、それを回復させる手段がほかならぬ社会開発としての観光なのである。回顧録の中で次のように述べている。

私は地域社会に住む人たちが本当の自主性を回復し、自信を持って生きてゆくような社会を作ってもらいたいと念願してきた。地域社会のなかにそういう芽を見つけない、その芽が伸び育ってほしいと思った（宮本 1993:

215）。

宮本は地域振興に関する論文や講演録のなかでしばしば「自主性」「自立」「自信」の回復・確立といった言葉を記している。これは島が周辺化され、離島になっていくに従って、経済的な後進性が自覚されるようになり皆が中央の基準に従い、自らの行ってきた生活や文化を劣ったもの、改廃すべきものと認識するに至ったからだという。そのために宮本が出す方策は、まずはインフラを本土並みにすること、特産品の産出によって自立経済を地域内に確立すること、そして文化への自信回復を行う手段として観光に取り組むことである。ただし観光が一律に生活世界に活力をもたらすものであるというわけではなく、むしろ宮本が観光に言及するときは、まずもって批判的文脈においてである。『離島の旅』の中で観光の意義を述べている箇所がある。観光が都市住民に対する僻地の存在証明になることを述べながら、次のように続ける。

そのようにして世人の意識にまず上ることが何よりも大切であるが、さてそこで行われている一般の島民の生活はどうであろうか。けっして高いとは言えない。むしろはなはだ低いと言える。そしてそこに生きている人たちは古い生活のなかからまだ何ほども抜け出してはいない。生業もけっして近代的であるとは言えない。ただ自分たちの生活と労働を忠実に守っている。その顔は素直で、わるびれたところもなければ媚びない。ただ恐れるのは、この人たちが自分の生活を高めるために意欲的に新しい産業と取り組み前進しようとする前に、多くの観光客の渡島によって、自分たちが自信を失い、卑屈になり、ずるさや媚びをもち自主的な精神を失いはしないかと言うことである。観光は観光客と地元の人たちの生活の差が少ないときにはじめて地元のものが圧迫感を持つことなしに受け入れることができるものである（宮本 1987b: 307）。

宮本にとって観光（マスツーリズム）は都市の経済による地方の浸食であり、「自分たちの生活と労働を忠実に守って」きた自立的な生活世界の破壊である。ホストとゲストとの格差が自覚されることによって人々はかえって自信喪失につながっていくものと捉えられる。宮本の言う離島性とは、このように経済的後進性と文化的コンプレックスが島の立地特性によって固定された状態を指す。離島論において宮本が繰り返すのは、マスツーリズムが観光産業の発展につながり、都市民の楽しみにはなっても、離島にはほとんど経済的に無益であるばかりか、生活や文化に有害であるという批判である。しかしインフラ整備や産業面では「資本主義経済機構へ正しい仲間入り」を主張した開発主義者であった一方、離島の生活が観光にどう向き合うべきか述べる段になると、宮本の視点は一転してポスト開発主義的な主張になる。例えば以下は長い引用になるが、離島青年に対する講演で新たな観光について述べた箇所である。

今日の観光というのは、そこへ行ってみたいという人は少なく、つまり連れて行かれる観光なんです。なんだか景色が良いと、そこへ連れて行ってもらって、転々と変わっていきなさいかん。しかも時間に合わせてバスが動く。わたしはどうしても行ってみたい観光地というものを作るべきだと思うんです。（略）われわれが外に色目を使うのではなくて、自分自身の持っているものに誇りを感じるようになってくると、事情は変わってくるのではないのでしょうか。言い換えると、皆さん自身のご先祖がその島で築き上げていった文化財、生活の糧にしたもの、それには非常にレベルの高いものがたくさんあるはずで。（中略）それらを通して一番知りたがっているものは何かというと、人の営みなんです。かつて人々はどうのように暮らしてきたのかと言うことなんです。それが情報なんです。つまり自分が生きていくために何らかの関わりを持つようなものを吸収したがついて

んです。そのことをわれわれは反省してみる必要があるのではないだろうか。そして自分の周囲でそういうものを見ていると、いくつも出てくると思います。先ほど述べた外部資本による色々な開発は、実は自らの手でできたのではないかと言うことに、すぐ思い至るだろうと思います（宮本 2014: 68-69）。

ここで言われていることはほぼマスツーリズム批判と住民参加型ツーリズムの祖型である。つまり外部資本によって構築された観光資源ではなく、「自分自身の持っているものに誇りを感じる」文化資源を自己発見し、それを外部に提示していく。しかも単に見せるのではなく、観光客が「人の営み」や「かつて人々はどうのように暮らしてきたのか」という他者の生活に触れつつ、「身をもって体験」するという、体験型の旅である。もちろんこうした考え自体今では言い古され、商品化された型だが、1970年代の時代性を考えると目新しい。加えて、典型的な中央依存型・利益誘導型だったインフラに対する当初の考えと、後の観光文化論／社会開発論とがかなり様相を異にすることにも注目したい。その背景には宮本自身の境遇変化もあろう。「離島振興」を謳い始めた初期の宮本の考えは、離島の僻地性の克服であり、問題の告発による予算獲得とインフラ整備であったが、その面での整備が浸透し始めた頃に宮本は新しい旅人の存在を知ることになる。

観光地というのは学生がどんどん来るようであれば、その発展性はないとみて良い。学生は旅行のパイオニアである。新しい観光地というのは全て学生が開拓するものである。（中略）島内に資本蓄積がなく、その経営の才能に長けた人がいないのであれば、ある程度は外部資本の導入が必要となるであろう。（中略）ようするに問題は外部資本との提携をどこでどうするかということである（宮本 2014: 40-41）。

このように「マス」ではなく尖端的なツーリストとしての学生の存在に気付き、彼らが新た

な観光の形を切り開くと考えるようになったのは、大学に勤め、観文研を設立するといった境遇変化が大きい。加えてここで「経営の才能に長けた人」との言い方をしているように、宮本の開発論は徐々に人材育成、地域リーダーの育成を含んだソフトな社会開発に移行しつつあった。それは外部からのエンパワーメントに至る発想に表れている。

自らが何かを試みたとき、そしてそれがある目標を持ってきた場合には、それにたいしてやはり自分なりの自己評価が起こってくる。さらにそれを周囲の人たちから見てもらって評価されることによって、自分のやっていることに意義を感じます。そのときに、その批評が情報であり、またそういう情報によって自分らがなにをなさねばならぬかということに気付くことは、その情報が活かされたことになるんだと思うんです（宮本 2014: 69）。

宮本の社会開発論は単に外部から観光客を呼び込むことに目的があるというよりも、当事者による文化のサルベージを契機とした意識面での改革、「離島性」の克服にあったとも言える。そのために「地域開発というのは、本当に自分たちの土地をどうしたらよいかと言う人たち、真剣に自分たちの土地の問題を、自分たちで解決しようという人たちが育ってこない限り、ありようがない」（宮本 1987a: 189）と述べているように、あくまでソフトな問題、自主性に基づく「社会の開発」を主張するのである。したがって宮本の観光文化論＝社会開発論は、谷沢明の言葉を借りるなら「地域の人々が結集して魅力ある地域を創り、訪れる観光客も地域文化発展の協力者になってほしいと願い、人々の交流が観光文化発展に寄与することを期待」（谷沢 2009: 14）するものであり、それを通じて生活の現場に自信と自立性の回復をもたらそうとするものであった。

#### Ⅳ 日本海からの反逆

実際に宮本が携わった社会開発の一例に、佐渡における博物館設立運動や民俗芸能の復興運動がある。「佐渡国小木民俗博物館」は、地域住民が主体となって漁具や農具、生活用品に至る多様な「民具」を廃校舎に集約したものである。この運動には島外からやってきた様々な人も関わっており、これを契機にローカルリーダーが複数誕生している。その後の近隣地域における町並み保存運動、宮本が創設にも関わった「佐渡国鬼太鼓座」（現鼓童）、鼓童が携わる文化振興拠点などは、宮本をハブとして拡がる運動体の中で生まれたものである（門田・杉本 2013）。宮本は地域振興の論文や講演会で頻繁に佐渡の例を「仲間」の話として紹介し、成功例として提示している。

わたしは佐渡で、「日本海大学」を作ろうと盛んにけしかけているんです。今年は何もやらないでかけ声ばかりじゃいかんと「日本海大学講座」というのをやったんですが、やってみて非常に教えられた。とにかく申し込みが120人ぐらいありました。小木町の宿根木という70戸ぐらいの小さな部落の公民館を借りて、机もないところで、みんなあぐらをかいて、先生たちも座って話をしました。近くに小木民俗博物館というのがあっ



図1 佐渡の位置

て、たくさん民具を集めてあります。そこに一軒農家が移築されているんですが、そこへ村のおばあちゃんたちが来てくれて、ご飯を炊いて、ご飯を食べて、そこを座談会の会場にして、民家へ泊めてもらって……。そういうじつに素朴な講座を開いてみたんです。たいていして宣伝もしないのに人が集まったと言うことにまず驚きを感じ、そして冷やかashiではなく、みんな熱心にものを考える。そういう若い人たちが、島のなかにこんなにもいたのかと、びっくりしたんです（宮本 2014: 72-73）。

近年刊行されている「宮本常一講演選集」シリーズには、上記の博物館を活用した例、旧羽茂町でおけさ柿（八珍柿）の生産を奨励し、大きな収益を上げるようになった話、鬼太鼓座（鼓童）の設立を支援してそれが郷土芸能を復活させ、なおかつ外部の人々にも大きな関心を集めるようになった話、旧小木町などで青年たちが宮本に教を請い、議論の場や現代版の若衆宿が結成された話など、佐渡の話が幾度となく繰り返されている。これらは「純粋な」民俗学者であることに限界を感じ、現前の社会的課題に回答する実践的な研究者となった宮本が、佐渡において繰り返してきた様々な実験的試みであるとともに、のちに宮本を紹介する文章において地域振興の成功例としてしばしば言及される例である。特に佐野眞一のルポ（佐野 1996）の後半ではこれらの事例が詳述され、実践家・宮本常一の名を知らしめた。

佐渡国小木民俗博物館は宮本社会開発の典型例である。佐渡の南端、宿根木集落にあった小学校は1970年に閉校し、1972年に民俗博物館として開館した（現在は佐渡市立）。その過程では、宮本の助言やエンパワメントを受けた地元のローカルリーダーたちが廃校再利用に関する議論を行い、地域住民とともに民具を収集し、博物館の設立を試みた。学校の教室をそのまま転用した展示室には、当時の生活において既に古くなりつつあった、しかし確かに生活の来歴を明らかにするのに不可欠な生活道具が多々集められた。館には地元の僧侶や若者が職員として勤務した。行政や

政治の場で進行したのではなく、宮本にエンパワーされたローカルリーダーを中心に、まさに生活の場から立ち上がった博物館である（中堀 1983）。この頃宮本は、地域振興の手法として博物館設立、民具の収集を盛んに主張している。

地域を知る手だてとしてもう一つ提案していることが「文化財の保存」なんです。その土地で長い間受け継がれてきた文化財を保存するという事は、地元の人たちが、自分の住んでいる土地を見直すことにつながると思うんです。（略）私は模型と同じように、方々で「民具の収集と展示」を勧めてきました。民具というのはその地方の人々が生活をする、あるいは生産活動をするときに、人間の手足の延長として、人間の働きを助けるものなんです。しかもそれが手づくりでなければならぬ。機械製品ではなく、ノコギリとかカンナとか口クロなど、道具を使って人間が手を動かして作ったものを民具といっています（宮本 2007: 132-133）。

宮本にとって民具学＝生活学であることは前述の通りである。生活の来歴を自ら省みながら客体化するには、生活を支えてきた道具・民具を集め、一覽できる施設である博物館を作ることが先決であり、なおかつそれを外部の人に見せることで、観光収入になるだけでなく一種の誇りや自信につながるという宮本的社会開発論の典型的な実践形態が民俗博物館の設立であった。

更に上記の引用部で述べられているように、この博物館や集落の公民館を舞台として開かれた「日本海大学講座」は、博物館を単なる箱物として据え置くのではなく、自らの生活や文化を捉え返し、外部（都市部）の若者と地元の若者とが交わることで新たな生活の糧、文化資源を探り出していこうとする創造的空間であった<sup>3)</sup>。学生運動が終息に向いつつあるなかで、離島の中でも更に周辺部に、若者の住処が見いだされたことは注目に値する。そこには東京＝中央＝権力に対する、日本海／佐渡＝周辺＝従属側による、文化を介した抵抗運動としての側面もあった<sup>4)</sup>。

## V 実践性をめぐる評価

再帰的な生活の客体化と、そこを場とした外部との繋がり形成、といった宮本の開発手法は現在でいうところの住民参加型開発の文脈に位置づけられる。既存の政治に依存せず地元の人々の参加を前提とし、そこに問題意識や主体的な議論が生まれ、外部の人間を巻き込みつつ新たな価値を創造し、そしてそれを都市の人間や観光客に伝えていく。観光客はそこにおいて単なる「まなざし」の送り手（つまり権力にあぐらをかいた傍観者）ではなく、彼らもまた実践への参加が期待される存在となる。このように書くと宮本の実践は「新しい公共」を謳ったローカルガバナンスや「下からの開発」研究の教科書に出てくるような試みを、そういった洗練された議論が登場する前に企てていたフロンティアと定位することも不可能ではない。しかし宮本の実践をめぐっては、その手法の新しさが持つ意味はともかく、地域社会に及ぼした正負両面の影響が冷静に評価されるようになっており、とりわけ負の側面、すなわち社会開発の失敗や瑕疵が取り上げられるようになっていく。

岩本通弥（2012）は民俗学における研究と実践の二面性について論じる中で宮本の佐渡での取り組みに言及し、佐野真一に代表される美談化を「宮本を弘法伝説のように美化する語り」と注意を促した上で、次のような議論を展開する。まず、佐渡国小木民俗博物館や付随する千石船の復元船展示室は、3万点を超える民俗資料と重要有形民俗資料を貯蔵し、伝建地区に指定された地元・宿根木集落とともに「ローカルな民俗文化を観光資源化した日本随一の成功例」（岩本 2012: 41）とされ、かつ宮本の協力で設立された太鼓芸能集団・鬼太鼓座・鼓童に関しても、佐渡で開催される国際音楽祭「アースセレブレーション」の成功や世界での活躍によって、宮本の成果と述べている。だが岩本は、「はたしてこれを除けば、宮本の地域おこしの実践が現在において功を奏したと言えるのだろうか」と疑念を呈する。

その理由は、離島振興法に代表される国の補助金に、当の離島社会が依存する仕組みが振興法制

定後60年の中で固定化されてしまったことであり、宮本自身も晩年それに気付いていたように、「中央依存の体質を離島に作り上げた、その典型」が佐渡・小木に見られるからだとしている。実際岩本のいうように、宮本は晩年離島振興の逆説を各所で述べている。

私は長い間島を歩いてきたが、最近、離島関係の補助金が今よりもたとえ三倍・五倍に増えても離島は良くならないという確信を持つようになった。それは、補助金政策により、島民が政治に依存する気持ちが強くなってしまったためである。これでは、いつまでたっても真に島は良くならない。島をよりよくするには、みんなでもっと島をみつめなければいけない（宮本 2013: 160）。

佐渡・小木にはこの法律関連で作られた文化施設が乱立している。海運資料館、佐渡考古資料館、幸丸展示館などの類似施設が集まり、宿根木集落にも体験学習館や文化施設が多く、「文化遺産のアミューズメント化した小木」（岩本 2012: 45）という様相を呈している。その背景に岩本は、離島振興や公共事業における高率の国庫補助率があったと述べている<sup>9)</sup>。こうした補助金は確かに宮本のいうように人々が自文化を再発見し、展示し、外部に見せることで誇りや伝承を可能にするような役割があることは確かである。しかし岩本がいうように、行政にとっては事実上観光資源として位置づけられ、政治のレベルにおいては、全国の離島振興関連予算のかなりの割合がかつて（とりわけ1990年代初頭まで）佐渡に割かれていた。その集中投下を宮本も感じ取らないはずがない。

佐渡島の両津の港などは、おそらく本土にもあんなりっぱな港はそうありません。飛行場と同じように、船が岸壁に着くと雨にも濡れないでトンネルみたいなもののなかをくぐって待合室まで出ていけるんです。むろん新潟のほうにもそれができている。あれを見て、佐渡は離島かと皆さんからよく言われる



んです。「まあ、あれくらいのことはしてい  
いだろう」なんて言っているが、内心わたし  
はあんなことに金を使うことには反対だった  
んです。あそこまでする必要はない。もっと  
鳥のことを考えるべきだと思うんです（宮本  
2014: 61）。

宮本はかつて離島生活者の自信を取り戻すため  
に文化の復興と新たな観光を提起し、同時に、観  
光客と生活者との経済的な格差がなくなったとき  
にこそ、観光が正常に機能すると述べた。そのた  
めに「資本主義経済への正しい仲間入り」を主張  
し、インフラ整備や産業振興を可能にする政治活  
動、ロビー活動を展開した。「あんなことに金を  
使」うことを可能にした当事者の一人はまぎれも  
なく宮本である。離島振興法の制定や全国離島青  
年協議会での活動、各地での盛んな農業指導や村  
作りの講演会は、それらが一体化した宮本なりの  
社会開発の実践であったが、それが結局のところ  
補助金を獲得する体質を生み出し、中央依存とい  
う逆説状況を生み出したことは、単に皮肉と言っ  
て済む話ではない。

佐渡において構想されたそれぞれの施設やプロ  
ジェクトは今、大きな岐路に差し掛かっている。  
宮本が最も力を注いだ旧小木町の文化施設の多く  
は閉館が予定されている。理由は市の財政的問題  
である。国庫補助は箱物としての建設に向けられ  
るのであり、維持はほとんど地元委ねられる。  
離島振興予算で作られ、地元の人々の文化的な自  
立性回復のために作られた船舶関係の博物館は、  
ソフトコンテンツとして十分に活用されたとはい  
いがたく、結局のところ入館者数というマスツー  
リズム的な発想のもとでその存在意義が測られ、  
運用や展示更新のために十分な予算が割かれるこ  
となく終焉を迎えつつある。

宮本が通い詰めた宿根木集落はその後、国の重  
伝建に指定され町並み保存が進んだ結果、現在で  
は年間数万人が訪れる佐渡の一大観光地になっ  
た。Uターンも多く、生活者によって地元の町  
並みや文化の発信がなされている。そのベースの  
構築に宮本が携わったことも確かなので、成功例  
ということもできる。ただ宿根木に訪れる観光客

の多くは、大手旅行社のバスツアー客であり、30  
分程度の短い滞在中に集団で戸数50の小集落を  
回遊し、ガイドの解説を聞き、有名な舟形の家宅  
前で記念写真を撮影し、嵐のように去って行く。  
典型的なマスツーリズムの出現形態のなかで消費  
されている。

通過型の観光地としての色彩が強いため、集落  
にそれほど経済的な利益があるわけではない。そ  
のため集落では会を作り、一人100円の入村料を  
集め始めた。バスツアーでは旅行会社が集金して  
いるので、相当な金額が集まるようになり、当初  
目的の公衆トイレや環境維持という目的を凌駕す  
ほどの収益が上がるようになった。自主財源が  
集まることは、経済基盤あつての住民参加型観光  
開発を謳う宮本の理想のようだが、この財源をど  
う活かすか現状定まっているわけではなく、とり  
あえず収益を上げること自体に暫定的な目的が置  
かれている状況は、旧来型の観光地経営から脱し  
ているとはいいがたい。

小木民俗博物館は他の文化施設と比べ、それな  
りの入館者数を保ったまま継続が決定されてい  
る。しかし財政面を見ると最低限に抑えられてお  
り、常設展示のリニューアルや新資料の追加はな  
く、ほとんど放置されているといって良い。職員  
は非常勤職員が配置されているが、常勤の学芸員  
はいない。そのため企画展や博物館機能を活かし  
た社会教育機能は果たせていない。地域から見れ  
ば、この博物館は住民参加で誕生した「誇り」で  
あつたはずだが、民具を持ち寄った住民も、開館  
してからはそれほど日常的な関わりを持ってない  
ようである。特に展示物が古く、1970年代初頭  
において既に過去の民具であつたため、現在の住  
民から見れば2、3世代上の道具である。従つて  
博物館やその展示物に現在の生活との連続性はな  
く、切り離された存在になっている。

博物館に併設された千石船展示場は、地元主催  
で年に一度建物から復元船を出し、帆を立てるイ  
ベントが行われている。住民の関心は博物館より  
もこのイベントに向いており、民具の収集によつ  
て村を作るという点は、ほとんど忘れられてい  
る。そもそも博物館には宮本をはじめ設立に関  
わつた人々のことや住民参加の経緯が触れられて



図2 復元された千石船（2016年8月、筆者撮影）

おらず、展示物も住民が持ち込んだことが分からないため、筆者らの調査で来館者にアンケートを取っても、その雑然とした展示の形態やなぜ学校を使っているのかということについて全く理解されておらず、単に廃校を利用したほこりをかぶった古い博物館程度にしか受け止められていない（門田 2016a）。

つまり、当初の宮本の理念は活かされないまま忘却の彼方にあるといえる。残ったのは補助金の削減とともに立ちゆかなくなった箱物群であり、ハード依存の文化運動の限界が物象化されて観察することが可能となっている。もちろん「それしか」残らなかったわけではない。佐渡では大きな売り上げを上げている柿、世界各地で集客を誇る鼓童など、明らかな遺産として残っているものも多い。他方で博物館を起点にした、モノを媒介に文化を展示し、集客するという計画は、その発想の時代的限界を否定しがたい。宮本は観文研の設立母体・近畿日本ツーリストの依頼で、伊勢など複数の箇所でも民俗博物館の設立に携わっているが、志摩民俗資料館は入場者数の低迷を理由に1998年に閉鎖されている。数を得たものが残り、数を得られなかったものが廃れていく、そうした典型的なマスツーリズムの論理に宮本の理念が回収されていったことは興味深い。なぜなら宮本こそがマスツーリズムの論理を批判し、観光に取り込まれない自律的で主体的な生活世界の構築を構想していたのであり、その構想が、当の批判対象であるところの、マスツーリズムによって取り込まれたからである。日本海大学講座は3回で途絶

え、中央資本の論理に抵抗するための「日本海大学」は実現することなく、その後職人の大学を作る構想が持ち上がるも政治レベルの戦いに敗れ、大学は全く別物として関東地方に設立された。

佐渡では宮本の薫陶を受けたローカルリーダーが多々育ち、様々な文化活動を先導していった時代がある。川森博司がいうように、宮本の著作や講演はアカデミズムに向けたものばかりではなく「当事者」に向けた、唱道色（アドボカシー）の強い呼びかけであったがゆえに、地域人材を社会教育的に育てるという目的は達せられたかに見える（川森 2012）。ただ、川森が宮本の呼びかけについてグラムシの言葉を引用しながら「有機的知識人」の結合を狙ったものだと述べたように、本来、ローカルリーダーたちの活動は互いに切磋琢磨し、結合のなかで価値を生み出していくことを期待されていたはずである。しかし若くとも60代後半を迎えつつあるリーダーたちの姿にわれわれ後代の者が見いだすのは、個人の力量は十分ありながらも、互いに分断された個別状況である。そこには「宮本先生」との個人的な付き合いや教えをシェアしえない、個人化の傾向も指摘せざるを得ない。いずれにせよ、最も成功した実験場である佐渡においてすら、宮本の社会開発的実践を全肯定できるような状況はない。

## Ⅵ 回収という問題

問題は成功か失敗か、ということではない。論点は、マスツーリズムを批判し、その抵抗の拠点として構想された運動体がいかにして「回収」されるに至ったのかという点である。なぜなら生活と観光との緊張関係は、まさにここに存在するからである。観光開発に関して人類学・民俗学が常に考えてきたのは、淡々とした日常の時空間において外部資本や消費形態に基づく観光現象が及ぼしてきた正負の影響であり、いかにして生活領域と融和可能な観光を作り出すか、ということである。その点から考えると、マスツーリズムを批判する側が批判対象の側に回収されるという事態は注目に値する。

ここでいう回収とは、ある文脈において生み出

された構想や目標が、当事者の意図しないところにおいて、別の文脈に人為的に置き換えられることを指す。単なる脱文脈化というより、例えるなら権力を批判してきたグラスルーツの出来事・現象が当の権力に取り込まれるような、垂直的な移行をイメージしている。もちろん歴史を考えると反体制的な運動があからさまに権力側へと転向していくこともないわけではないが、むしろ我々が歴史を通じて見てきたのは、当事者としては権力を批判しているつもりが、いつの間にか権力の側からみて都合の良いことを主張しており（そしてそのことに気づいておらず）、批判対象であったはずの権力の側に今度は自分自身が立っているという現象である。

宮本の観光文化論／社会開発論は大規模資本に依拠する観光開発を批判し、離島の自立をエンパワーメントする思想を持っていた。自立的な発展を行うための産業（生業）を育てることを主張し、佐渡においては柿の商品化、文化の再発見とその展示・表象を活かした新たな観光の勃興を目指した。そのために必要だったのが道路や港であり、また展示のための各種施設であった。「陳情政治」を批判していた宮本ではあるが、彼が村にやってくると人々は研究者というよりも中央と繋がりのある権力者であるとみなして「要請」をした（宮本常一追悼文集編集委員会編 2004）。佐野眞一が述べたように、田中角栄的な開発を否定した宮本が、典型的な利益誘導型開発に帰結してしまったのである。回収とは従って、消極的な政治行動であると言える。その意図の有無はここではあまり関係がない。意図や作為があったかなかったとは別のレベルにおいて、帰結された事実は事実として存在する。

もちろんいかなる文脈にも回収されない言説や行為は存在しない。例えば宮本とはまた異なる形で村における観光と地域開発の自立性を主張する古川彰・松田素二は次のように述べている。

現在、過疎化と高齢化、それに第一次産業の危機的状況に苦吟している全国各地の小さな共同体は、苦難の中の一筋の光明をグリーンツーリズムの可能性に見ていることは間違

いない。本論が強調したいのは、こうした小さな共同体の努力を、環境保護、人間重視、自然と共生といった都市で作られたスマートな知の体系の中に回収させてはならないという点である（松田・古川 2003: 21-22）。

古川らが述べているのは村＝「小さな共同体」を称揚し、市場経済主義のような大文字の概念に対置されるものへと昇華させることへの警戒である。古川らは「小さな共同体」の試みが大規模開発への抵抗となる可能性を見いだしつつも、他方でそれへのアンチテーゼとして純粹化されることへの抵抗の必要性も述べている<sup>6)</sup>。しかし大文字の概念への回収を避けている注意深いポジショニングが我々に想起させるのは、このような回避が果たして可能かという疑念である。古川らはグリーンツーリズムを事例に挙げており、確かにこのようにいずれの文脈にも回収されえない「小さな共同体」における実践が本書には描かれているにせよ、オルタナティブツーリズム自体が、現在では完全に「商品」として定着し、業界ができ、「オルタナティブ」であること自体が商品価値を有するようになってきている。そのことを踏まえると「限定的な主体性」の行方が、宮本と同じ轍を踏んでいないかどうか危惧することは十分に可能であり、政治的な意図の回収への可能性は常に開かれているとみるべきではある。

従ってここで、どのようにすれば宮本の観光文化論／社会開発論は権力や資本の論理に回収されなかったのかを仮定的に論じても仕方がない。むしろ我々が考えるべきは、いかなる局面においても無作為な政治性は生み出される可能性があり、意図せずある種の文脈に回収されていく実践的研究が存在していることを大前提にしたうえで、その条件、つまり回収されるに至った背景や原因を事実として一つ一つ積み重ねていくことである。

前出の岩本通弥は、宮本の社会的実践を回収に至らしめた理由を2点挙げている。1点目は明快で、中央依存を主張しながらも補助金に依存する振興策に、最初に乗ってしまったことである。後年になっていくら補助金依存を批判したところで、博物館や文化施設はそのような補助金システ

ムと不可分に作られたものである以上、宮本の補助金依存批判はトートロジカルなものにならざるをえない。2点目は宮本における無批判な民衆賛美や共同体賛美だという。岩本は離島に著しい依存体質を生んだ背景には「宮本に内在する思想性に起因する問題」があるとして、宮本が著作や実践において「力強く生きた民衆」を時に誇張しながら描き出そうとした点、またそれを通して「共同体の美」「美しい国土・民族」を描こうとした点にあると述べている。思想の科学研究会による著名な転向研究において、藤田省三は宮本を「大衆崇拜主義」「農本主義的で保守主義的翼賛理論」家であると位置づけたが（藤田1960）、仮に古い「共同体の美」を描きたい保守主義的イデオロギーがあったとして、なぜそれが実践の「失敗」へと帰結したのか。岩本の説明はこうである。

民俗学は、柳田国男の「公民論」「経世済民」の例を引くまでもなく、当初から科学性と実践性の二面性を内包してきた。ところが、1950年代以降の文化運動のなかでは「サークル運動」や「民話運動」のように、伝統的な生活を賛美しそれをもって資本主義体制批判を行うグループが登場し、宮本はその中に位置づけられていくが、この流れは「研究成果に基づく」実践を行うと掲げながらも、実際は伝統や古い共同体を維持・復興させるというイデオロギーやノスタルジー（それを岩本は「フォークロリズム的問題」と述べている）に自ら絡め取られることになった。そして実践的成果を優先させるあまり、本来不可分であったはずの科学性を失ったというわけである。

岩本の議論は、より「科学性」を担保した実践的研究を行おうとした柳田国男直系の民俗学者・橋浦泰夫との対比で宮本を語っているので、議論はもう少し複雑ではあるが、ここに至って我々が思い出すのが、宮本常一が地域の課題に应答するための問題意識から、既存の民俗学批判を行い、民俗学から生活学へと鞍替えした経緯である。宮本はしばしば離島性が近代の交通・経済体制のなかで事後的に構築されたものであることを述べ、かつて島にあったと思われる文化的・経済的な豊かさを回復することをしきりと述べている。それは古い共同体の美を謳ったものであるといっても

間違いではないし、そのことを実行する方策が補助金による基盤整備であり、かつ古い習俗の復興と展示であった。これらの宮本の実践に科学性が欠落していたかと言えばもちろんそうは言い切れない。しかし近年講演集などが出版されるようになり明らかになりつつある宮本のエンパワーメントの具体策は、離島の状況に関する危機迫る演説であり、研究と一体化した実践活動というよりはアジェンダに近い。

岩本通弥は、宮本の「失敗」の本質が科学性を伴わない実践性であると述べたが、それは決して、全ての実践は科学（学問）に立ち返らなければ成功しないという主張ではない。それでは結局のところ研究至上主義に帰結してしまうだけであり、まともな社会開発のなかでも別に研究とは離れたところで成功に至るものはいくらでも想定しうる。岩本が述べているのは、宮本的な社会開発が回収に至ったという意味で「失敗」した構造は、彼や谷川雁らのサークル運動・文化工作運動が、研究の世界との対話を閉ざし、保守主義的なイデオロギーに固執することで社会へのアクチュアリティを失ったことと同じ構造だと述べている点である。従って問題は、なぜ文化運動的だったことが回収に至ったか、という点の考察であり、最後に本論は、「参加」をキーワードにこの点を検討して終わりたい。

## VII 参加の隘路と「関係性の美学」

手がかりとして参照したいのは近年の参加型アートプロジェクトに対する「関係性の美学」批判である。アートプロジェクト、あるいはリレーショナルアートと呼ばれる参加型のアート活動は20世紀末以来世界各地で見られ、日本でも「大地の芸術祭」や「瀬戸内アートトリエンナーレ」など数多く実施されている。そこではアート空間の構成要素を専門家やミュージアムといった権威が独占するのではなく、地域社会や住民、ボランティアの参加を促し、人々がその過程に関わることが新たな展示空間の形成に至るものとして理念化されてきた。地域芸術イベントだけでなくフィールドミュージアム、住民が作り上げる民俗

芸能祭やパブリックアート、景観保存運動など、住民参加型アート空間は急拡大している。

このリレーショナルアートの理念を支えてきたのは、フランスのアートキュレーターであるニコラ・ブリーオーが述べた「関係性の美学」という理念である。これは展示活動に参加する人々が関係性を形成すること自体に意義を強調するものであり、アート空間における開かれた住民参加が、既存の権威的な美術へのアンチテーゼとなることを示した、現在のアートと地域を考える上でのキーワードである。アートの価値を作品そのものではなく、観客を含む参加する全ての人々の関係性を協働やコミュニケーションにあるとした、いわば「生活と観光の融合」の典型例ともいって良いだろう。

だが閉じた展示を社会に開き、ファインアートや民俗文化財制度の権威性を乗り越えるという当初の理念は形骸化し、住民が参加するイベント性や「にぎわい」自体が目的化され、近年では行政による地域活性化事業の一環に取り込まれる事態も生じている。従来のアート空間を特色づけてきた「住民参加」や「公共性」「社会に開かれた博物館」等の概念も使い古され、地域振興策あるいは予算獲得のためのラベルとして流布する倒錯状況が生じている。

これに対してクレア・ビショップ (2016) や藤田直哉ら (2016) から近年批判的な検討がなされている。前衛的で社会批判性を有した当初の参加型アートが、地域振興策の道具として地方自治体のロジックに回収され、思想性を欠いたマイクロユートピア、すなわち「安定した調和的な共同体のモデル」わかりやすく言えば「内輪の盛り上がり」になってしまったことが批判的に捉えられている。これは単に、参加者だけが内輪で盛り上がっている、というだけの話ではない。藤田は田中巧起の以下の言葉を引用している。

プロジェクトは完結せず常に進行形で見せられる。そこには複数の人たちが関係するため、誰も全体像を把握することができない。それは継続した体験が連続しているようなものです。「全体が把握できない」という作

品のあり方は、その外見が開かれているように見えて、ある一点において、実際はとても閉じられている。それは暗黙のうちに誰かによる批評や分析を封じているからです。ほくらが何を言っても全体像に到達しない。(略) 言ってみれば、他者の言葉が閉め出されている状態にあるとも言えます (藤田 2016: 30)。

閉じた状態において「他者の言葉が閉め出される」状況は、岩本が述べたように、社会変革を求めた文化運動が保守主義的イデオロギーに固執するあまり、既存のアカデミズムと対話を閉ざすだけでなく、徐々に社会とのアクチュアリティを失うことで衰退していった状況をパラフレーズする。更に興味深いのは現在見られるアートプロジェクトが「68年の叛逆の精神」を出発点とし、既存のアートを打破していくことで社会変革を狙っていたにもかかわらず、そのような変革の精神が現在の「地域活性化」に回収されていったという、宮本的な社会開発論と軌を一にするような藤田の指摘である。その例を藤田は日本を代表するアートキュレーター、北川フラムに求めている。

北川は自身がプロデュースする「大地の芸術祭」の目的に「地域が元気になる」ことを込め、「そこにいるじいちゃんばあちゃんが元気になるために何ができないだろうか」ということを述べている。その言葉を引いた上で、藤田は以下のように述べる。

もちろん、「中央-地方」の問題や、グローバル化と均一化への抵抗、地球や大地の価値の擁護などの、思想的な背景があってである。ここで問題にしたいのは、それらの思想の経緯があつてなお結果としては、非常に素朴である、ということである。(中略)「美」ではなく、理論や思想、イデオロギーなどの、芸術に固有ではない原理が先導してしまったとき、そのジャンルは、存在する固有の意味を喪失してしまう (藤田 2016: 37-41)。

こうした「68年の革命的で新しいものだった『叛逆』が、国策による地方活性化に利用されてしまう」（藤田2016:38）事例は、まさに同じ時期に佐渡の先端部から「日本海」の時代を掲げ、地元の生活者の参加と自立性の回復を主張した宮本の社会開発論、そしてその実践性が素朴な古い共同体賛美に支えられながら徐々に吸引力を失い、マスツーリズムの論理に回収されていったこととほとんど大差がない。北川は1948年生まれの団塊の世代であり、宮本が佐渡で集めた若者の世代にあたる。実践に至るまでの思想的な共通項があるとすれば、その限界もまた共通している。

本論が見てきたのは、生活、参加、民衆の世界への審美的かつ肯定的な態度が時に意図せず消費社会や政治的なものへの回収を後押ししてしまうという逆説である。関係性の美学、あるいは参加型のリレーショナルアートの議論は、「参加」することだけに意義を強調してはもはや出口がないことを示している。参加や協働が誰に何をもたらしうるのか、といった観点で次なるステージへ議論をステップアップさせることが求められている。宮本の博物館計画、それを支える開発思想もまた、参加や協働に意義が置かれ、確かにある時期にその盛り上がりは存在した。だが運動であるがゆえの限界は、そのカーニヴァル型コミュニティ（バウマン2001:260）としての隆盛の一時的性であるとともに、「参加」の次にいかなる目標や理念を打ち出すことができるのかという、日常化、つまり生活のなかに運動をランディングさせる手法の欠如であったといえる。生活と観光の境界が消失しつつある、といわれる現在、我々は「観光を飼い馴らす」ことを考える必要がある。それはポスト運動的な日常性のなかに観光を引きこみ、「ありふれたもの」として再解釈が果たして可能か、ということへの取り組みによってなされるべきである。

## 注

- 1) 本論文は日本生活学会2016年度研究大会（2016年5月27日、立教大学新座キャンパス）のシンポジウム「生活と観光」における口頭報告を元としている。梗概は既に同学会誌に収録されたが（門田2016b）、本論文

はそのフルペーパーを修正したものである。

- 2) 桜田や福田と更に異なるのは、宮本の生活学が出生地・周防大島における自らの生活体験と結びついてきたことである。宮本のいう「生活誌」を柳田国男の民俗学と比較しつつ、岩田重則は次のように述べている。「ほんらい、民俗学はみずからの生活体験に基づき、それらへの疑問から仮題を設定していく、プラグマティックな現実拡大的学問であり、枠組の固定化はもっとも避けられるべき学問である」（岩田2013:13）。岩田によれば、このような「生活体験の延長上に展開させた」宮本の学問は、「人間不在を最小限にとどめる」ことを可能にした一方、「極端な主観性また自己投影をも生む」ものだった（岩田2013:15）。宮本民俗学がアカデミアの民俗学で長く評価されてこなかった理由はまさにここにあるといえる。
- 3) このように民俗博物館創設の動きが見られた1970年代はじめの南佐渡は、観光文化研究所、武蔵野美術大学の学生たちやその卒業生らによるTEM研究所の研究者たちに加え、「おんでこ座夏期学校」のように首都圏からの若者が多数出入りする場所になっていた。
- 4) 日本海側の中でも佐渡は人口減少が著しい。国勢調査によると戦後佐渡の人口は11万3千人（1960年）→9万2千人（1970年）と、宮本が通い始めた時期に右肩下がりとなっており、特に14歳以下の人口は同じ10年間で4割近く減少している。
- 5) 岩本によると、かつて港湾漁港の外郭施設は全額国庫負担、道路は4分の3、教育施設は3分の2が国庫負担であったという。また文化遺産関連は通常国庫50%、県25%、自治体25%負担のところ、離島振興法対策実施地域指定であれば地元負担が更に軽減される特例があったという。
- 6) そのような難しいポジショニングを「マクロな権力構造のなかに布置されそのなかで限定的な主体性を発揮する共同体」（松田・古川 2003:220）と表現している。

## 文 献

- 池田哲夫（2010）：佐渡と宮本常一—地方の民俗研究者との交流、佐渡・越後文化交流史研究、10、pp.15-23
- 岩田重則（2013）：宮本常一—逸脱の民俗学者、河出書房新社
- 岩本通弥（2012）：民俗学と実践性をめぐる諸問題—「野の学問」とアカデミズム（岩本通弥・菅豊・中村淳編「民俗学の可能性を拓く—「野の学問」とアカデミズム」青弓社）、pp.9-82
- 門田岳久（2016a）：博物館と住民参加—「佐渡國小木民俗博物館」にみる地域とのかかわり方、交流文化、16、pp.34-41
- 門田岳久（2016b）：宮本常一の社会開発論と「回収」の論理—参加と関係性の隘路をめぐって、生活学論叢、29、pp.56-58

- 門田岳久・杉本 浄 (2013) : 運動と開発— 1970年代・南佐渡における民俗博物館建設と宮本常一の社会的実践, 現代民俗学研究, 5, pp. 33-49
- 川森博司 (2012) : 当事者の声と民俗誌—日本民俗学のもうひとつの可能性, 東洋文化, 93, pp. 199-218
- 佐野眞一 (1996) : 旅する巨人—宮本常一と渋沢敬三, 文藝春秋
- 谷沢 明 (2009) : 宮本常一の観光文化論, 愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告, 4, pp. 1-16
- 中堀 均 (1983) : 佐渡国小木民俗博物館—民具の収集, 博物館研究, 184, pp. 59-63
- バウマン, ジークムント (2010) : リキッド・モダニティ—液状化する社会 (森田典正訳), 大月書店
- ビショップ, クレア (2016) : 人工地獄—現代アートと観客の政治学 (大森俊克訳), フィルムアート社
- 藤田省三 (1960) : 昭和15年を中心とする転向の状況 (思想の科学研究会編「共同研究 転向 中巻」平凡社), 3-49
- 藤田直哉 (2016) : 前衛のゾンビたち—地域アートの諸問題 (藤田直哉編「地域アート—美学/制度/日本」堀之内出版), pp. 11-44
- 古川 彰・松田素二 (2003) : 観光という選択—観光・環境・地域おこし (古川彰・松田素二編「観光と環境の社会学」新曜社), pp. 1-30
- 宮本常一 (1980) : 離島性について (「離島の四季」暁教育図書), pp. 51-55
- 宮本常一 (1987a) : 宮本常一著作集2 日本の中央と地方, 未来社
- 宮本常一 (1987b) : 宮本常一著作集32 離島の旅, 未来社
- 宮本常一 (1993) : 民俗学の旅, 講談社
- 宮本常一 (2005) : 宮本常一著作集45 民具学試論, 未来社
- 宮本常一 (2013) : 宮本常一離島論集別巻 離島振興は進んでいるか/離島青年会議に寄せて, みずのわ出版
- 宮本常一 (2014) : 宮本常一講演選集4 郷土を見るまなざし, 農文協
- 宮本常一追悼文集編集委員会編 (2004) : 宮本常一—同時代の証言, マツノ書店